



図4—生命誌マンダラ
1つの受精卵から生まれる生きものたちを描き、ゲノムが階層性を貫くことを考える(JT生命誌研究館)。

ものたちの暮らす姿が浮かび、その向こうに世界観が見えてくる。「事」には時間があり、関係がある。時間と関係とは歴史を生み出す。まさにこれこそ生命であり、私が「生命誌」にこだわる所以である。

熊楠は「事」という捉え方を基本に、事の世界で起きる諸々の因果関係を結ぶ「縁」の重要性に気づいた。ここからいわゆる「南方曼陀羅」が生まれている。熊楠自身が曼陀羅として描いている図2は、まさに「事」から出発している。もう1

つ、鶴見和子が中村元の命名として「南方曼陀羅」と呼んだ図3がある。こちらは、さまざまな曲線が交錯しており、これらが「宇宙を成す」と書かれている。この図のどこをとってもすべてとつながっているのだ。生体の代謝マップを見るとどの物質もすべてとつながっており、ここでも生命を思い起こす。曼陀羅論をする余裕はないが、私にとって重要なのは、「曼陀羅が森羅万象のことゆえ、一々実例を引き、すなわち箇々のものについてその関係を述ぶるにあらざれば空談となる。抽象風に原則のみいわんには、夢を説くと代わりしことなし。そのうち小生面りいろいろの標品を示し、せめては生物学上のことのみでも説き申し上げべく候」という言葉だ。研究館創立20年を期に21世紀の科学を踏まえて、「生命誌マンダラ」を描き、大日如来にあたる中心には一つの細胞を置いた(図4)。これを受精卵として、そこから個体が生まれる発生を描き、ゲノムによって分子、細胞、組織、器官、個体、種、生態系という階層性を貫く生きものの世界を表現している。中心の細胞を原初細胞と見て進化を思い浮かべることできる。「重ね描き」から生まれる実体のある世界観を描き、南方熊楠という先達を意識しながら生命誌を深めていこうと思う。

特集南方熊楠

クマグスとボク

齋藤成也 さいとう なるや
国立遺伝学研究所

南方熊楠を知ったのは、ボクの人生の中ではずいぶん遅いほうだ。人類学の大学院修士1年生

のときに、ようやく『南方熊楠——地球志向の比較学』を購入している。大学に入ってから留学するまでの7年半のあいだ記録していた書物収集カタログによれば、1981年1月18日、1412冊目とある。本文庫はその年の1月10日刊行とな

Kumagusu and boku
Naruya SAITOU

っているから、おそらく書店に出回ってすぐに見つけたようだ。当時本駒込に下宿していたが、その近くの南天堂で買い求めたと記してある。

南方熊楠関係の書籍は、現在はすべて福井市にある実家に数年前に建設した書庫「懐無堂」におさめてある。実家にもどった際にこれらの書を調べてみた。彼の名前は、おそらく学部生の時から読んでいた柳田國男の本や人類学、民俗学のいろいろな本で聞き及んでいたのだと思うが、まとまった本としては、この鶴見和子のものが最初だった。その60頁に、クマグスが幼少のころ「日本のゲスネルたらん」と志したとある。その部分に当時のボクがつけた二重丸があった。実は、ボクもゲスネルみたいになりたいなあ、中学生の頃からひそかにおもっていたのです。1967年から10年にわたって刊行された小学館の大日本百科事典(ジャポニカ)を、中学生だったボクは愛読していた。なにかの項目を調べるためにみるのではなく、あちこちおもしろそうな項目を探して読んでゆくというタイプの読者だった。中学校では、そのことでいじめられたこともある。百科事典を引くのではなく、読むばかなやつというわけだ。後年、フランス人の共同研究者にそれを話したら、「百科事典は私も同じように読んだよ」と言ってくれた。さすが百科全書を生んだ国の人である。

それはさておき、中学生だったボクは、それなりに大人物についての知識があるつもりだった。だから、ジャポニカに載るくらいの人名は、たいはい読む前に耳にしたことがあった。ところが、あるとき、まったく聞いたことがない人物に出会ったのである。それがゲスナーだった。ジャポニカ第6巻の554頁に、15行だけ記述がある。文責は石田寿老。知らない方なのでグーグル検索したら、東京大学理学部動物学教室で教授だったようだ。さて、ゲスナーである。中学生のボクにとってショックだったのは、自分が知らない人だったというだけではない。なんと16世紀に生きた人なのである。400年も前の人の事績がしっかり残されているのには驚いた。そこでふと考えた。このくらいの人ならば、ボクにもなれるかも、と。

ボクが生まれた土地の少し北に三十八社という地名があるが、そこは奈良時代に活躍した泰澄大師生誕の地とされており、かつては38ものおやしろがあったそうだ。小学校1年の春の遠足でそこに行った記憶がある。1200年以上前に活躍した人がまだ記憶されていることに、小さかったボクはぼうっとしてしまった。それから比べれば、たった400年前の人間の事績が百科事典にちいさく取り上げられているのだから、ひょっとしたらボクだって、と思うのは、あさはかであろうか。

とにかく、日本のゲスネル(=ゲスナー)たらんと志したクマグスに親近感を覚えたのである。1982年から4年間のアメリカ留学からもどると、和書の渉猟がふたたびはじまった。クマグス関係で次に購入したのは、『大博物学者』²である。1989年3月27日購入とある。同じ日に『父南方熊楠を語る』³も購入した。そのすぐあとには、『南方熊楠——親しき人々』⁴も求めている。そして破天荒な自然児、クマグスをすっかり好きになってしまったのだ。日本からさっさとアメリカに留学したというのも、好もしかった。ボクも、大学に入った方がいいが、大学の雰囲気、東京の雰囲気に失望してしまい、今も続く日本嫌いになった。そこで、いずれは留学をしようと思い立ち、高校時代に授業科目としてはあまり好きではなかった英語をしっかりと勉強し直して、ちょうどクマグスと同じくアメリカに4年間留学したのだから。もっとも彼はさらにイギリスで8年間暮らしたのだが。

クマグスの思想に深く触れることができたのは、『南方マンガラ』⁵に負うところが大きい。真言宗の僧侶土宜法龍にあてたいわゆる「ロンドン書簡」のなかに、事(コト)の世界が物(モノ)と心(ココロ)の世界の共通集合だというベン図(p.902)を書いているのだ。これにははびれてしまった。その後、いろいろな講演で紹介したし、複数の著書、たとえば『生物学者と仏教学者 七つの対論』⁶でこのことに触れた。『森のパロック』⁷もクマグスについての興味深い視点を提供してくれた。

こうして、すっかりクマグスファンになった私

は、書店で関連書籍を見つけると購入してゆき、20冊ほどになった。なかには、敬愛する水木しげる氏の描いた『猫楠』⁹もある。『南方熊楠 一切智の夢』¹⁰は、著者がクマグスに尊敬と愛情をこめて書き進めた感じが伝わってきて、しかも他書にはない新しい情報ももりこまれており、おもしろい本だった。

ところで、私は昨年3月までの3年間、総合地球環境学研究所のインダプロジェクトにかかわっていた。主宰されていた長田俊樹さんがプロジェクトの終了とともに彼の膨大な蔵書の置き場がないとこぼしていたので、待ってましたとばかり、私の書庫「懐無堂」にはまだまだ本を収容できますよとお話した。そこで彼の本棚から500冊ほど私が読んでみたい本を選んで借り受け、福井と京都を車で往復して本を移動した。そのなかの30冊くらいはクマグス関係の本なのである。クマグス関連本は膨大で、しかもこれからますます増えてゆくだろうが、まあ50冊ほど持っている私は、かなりのファンであろう。もっとも、これからしっかり読まないといけません。

『ダーウィン入門』¹¹を刊行したときに、あとがきでダーウィンと自分の似ているところを論じてしまった。噴飯物だろうが、ボクはおおまじめだった。尊敬する人に少しでも似ていたいと思っていいではないか。ということで、クマグスとボクで似ているところをさらにいくつかあげて、本稿をおわりにしたい。彼はココロの世界とモノの世界の共通集合がコトだとした。ボクは心身一元論にたっているので、彼と少し考え方は異なるが、コトとモノの似ているところとちがうところを、若い時からあれこれ考えてきた。仏教をはじめとして宗教に興味を持ったのも似ている。まあ人類学を志したのだから、あたりまえか。膨大な著書や論文をものしたクマグスだが、ボクも自然科学畑の人間にしては著書をけっこう出している。今年8冊目の単著(初の英語)¹²が出るし、論文はそろそろ200編を超える。クマグスは全国の村のやしろの鎮守の森を守る運動を起こしたことで、自然保護運動の父ともいえるだろう。ボクはこのよ

うな公的活動はまだなにもしてはいないが、中学生のころから公害を忌避し、環境保護に興味を持ってきた。いまで言うエコである。福井市の実家には、かつて父親、原子光生が使っていた薪ストーブを設置して、楽しんでいる。クマグスの天衣無縫ぶりにはとてもついてゆけないが、若い時には飲むとよく道路に寝ころがっていたし、すぐハダカになりたがるのは、多少は彼に似ているかもしれない。また、彼のあらわした和文には多くのユーモアが入っていた。柳田國男のしかめつらした文章とは大違いだ。ボクもユーモアを好む。この小文を読んでいただいても、そう感じていただけるのではないだろうか。最後に。クマグスは、幼少のころから「この世」が嫌いだったのではなからうか。ボクもそうなので、なんとなく彼もそうだったのではと思っているのだが。これから追究したい仮説である。

文献

- 1—鶴見和子：南方熊楠—地球志向の比較学，講談社(1981)
- 2—平野威馬雄：大博物学者—南方熊楠の生涯，リポート(1981)
- 3—南方文枝・南方熊楠著，谷川健一・他編：父南方熊楠を語る，日本エディタースクール出版部(1981)
- 4—笠井清：南方熊楠—親しき人々，吉川弘文館(1985)
- 5—中沢新一責任編集：南方マンガラ(南方熊楠コレクション1)，河出文庫(1991)
- 6—斎藤成也・佐々木閑：生物学者と仏教学者 七つの対論，ウェッジ選書(2009)
- 7—中沢新一：森のパロック，セリか書房(1992)
- 8—水木しげる：猫楠—南方熊楠の生涯，角川書店(1996)
- 9—松居竜五：南方熊楠 一切智の夢，朝日選書(1991)
- 10—斎藤成也：ダーウィン入門—現代進化学への展望，ちくま新書(2011)
- 11—N. Saitou: Introduction to Evolutionary Genomics, Springer-Verlag(2013, 印刷中)

熊★楠★探★訪 File01 壺から出てきたものたち

かつて熊楠邸にあった古い壺の中から、干からびた大きなウツボが……。干からびたカメもいた。ただ残念ながらラベルはついていないので、熊楠がとったという保証はない。南方熊楠顕彰館収蔵庫にて。(編集部)

